The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | トマス・チッペンデール『紳士と家具職人のための指導書』のシノワズリに関する一考察 |
| Author(s) | 門田, 園子 |
| Citation | デザイン理論. 2015, 65, p. 45-58 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/56342 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# トマス・チッペンデール『紳士と家具職人のための指導書』のシノワズリに関する一考察

門　田　園　子

キーワード
18世紀イングランド，シノワズリ，マシュー・ダーリー，トマス・チッペンデール，様式
The Eighteenth century England, Chinoiserie, Matthew（Matthias）Darly, Thomas Chippendale, Style

はじめに
１．チッペンデールとダーリー
２．『指導書』にみられる「中国」，およびその情報源
３．『指導書』にみられる「様式」
おわりに

## はじめに

本稿はトマス・チッペンデール（1718–1779）著『紳士と家具職人のための指導書』[1]（以下『指導書』）を取り上げ，チッペンデールのシノワズリ（中国趣味）を明らかにする試みである。『指導書』初版は1754年に出版され（以下初版），誤植を改めた版が翌年に，1762年には改訂第三版（以下1762年版）が出された。1762年版はフランス語に翻訳され，欧米諸国でも広く読まれ，現在にいたるまで参照されている家具の手引書である。ジョージ王朝時代（1711–1814）に類似のパターンブックが急増し，建築約250点，家具約40点が出版されているが，チッペンデールの『指導書』以来，家具に建築同様デザインや様式の概念をあてはめ，家具を商品とみなし，カタログから好みに合わせてデザインを選択・注文できるシステムが生まれた。家具＝奢侈品を自由に選ぶ富裕層が ‘Gentleman’ という呼び掛けに応じる潜在的消費者層であり，『指導書』は18世紀英国の消費革命を語る証左であろう[2]。本稿で取り上げるシノワズリ家具も消費者が求めた様式の選択肢のひとつである。20世紀のシノワズリ研究者が繰り返し語ってきたように，シノワズリあるいは中国趣味は，現実の中国とはかけ離れた「イメージ」上の中国が視覚化したものであった[3]。シノワズリが西洋の人々による全くのイマジネーションかどうかはさておいても，今日の我々からみて，そこにはたしかに「東洋的」な図像が実を結んでいる。また，『指導書』には ‘china’，‘Chinese taste’ などのように意匠だけでなく，「中国」を指す言葉が多用されていることからも，そこには意味するもの／意味されるものの

関係が成り立っている。シノワズリは１）‘Chinese table’，‘China shelf’などの家具の名称，２）格子，花鳥，風景，人物など装飾や浮彫の図案，３）ジャパニング（擬漆風ワニス塗り）の技術，４）陶磁器に大別できる。３）４）については，先行研究で言及されてきたので[4]，簡単に触れるにとどめ，本稿では１）２）を検証した上で，以下の二点を考察対象とする。

第一点は，チッペンデールがシノワズリを家具のデザインに取り入れる際，どのような情報に触れる機会があったのか，1754年以前に出された出版物や先行例を踏まえ，考察する。17世紀には中国風装飾の家具の例がすでにあるが，稿者は『指導書』の銅版画の大部分，とくにシノワズリの図版の大半を手掛けたマシュー・ダーリー（fl. 1741–1778）が，シノワズリ図案を提供し，チッペンデールが家具設計をする，いわば共著者の関係にあったことを指摘する。

第二点は，家具の様式について考察する。『指導書』にはシノワズリとともに，ゴシック，モダン（あるいはフレンチ。ロココ様式を指す）様式が掲載されているが，三様式はしばしば混同され，境界は曖昧である。チッペンデールに先行するウィリアムとジョン・ハーフペニーによる『適切に装飾された中国とゴシックの建築』[5]のように，もともとかけ離れた二つの様式は，建築や家具に新しさを加味する要素であり，同じように扱われるか，時には区別されずに引用された。従来はこれらの様式が化粧室などの女性用の室内や，戸外のサマーハウスや庭園に用いられ，対する新古典様式は建物の外装をはじめとし，主賓室や男性を迎える客間，食堂に用いられる傾向があることからも，シノワズリ，ロココ，ゴシック様式は非公式の場に用いられ，新古典様式とは対立する様式であるとする見方が示されてきた。しかしながら，稿者はチッペンデールが古典様式を規範として，シノワズリ，ロココ，ゴシック様式の家具を設計していたと考える。

以上の点を明らかにするべく，本稿ではチッペンデールの『指導書』に現れたシノワズリを考察する。

## １．チッペンデールとダーリー

1718年６月５日ヨークシャー州オトリーで家具職人の家に生まれたチッペンデールは，遅くとも1749年にはロンドンに拠点を移していたことが分かっている。チッペンデールとダーリーが出会った時期について，クリストファー・ギルバートはチッペンデールがヨークにいた頃すでにダーリーから素描の講義を受けたと述べているが，明らかではない[6]。『指導書』の初版を製作していた1753年頃は，ストランドのノーサンバーランド・コート右手最初の家で二人は共同生活を営んでいた。ダーリーの発信する最先端のスタイルをチッペンデールが家具として成立するプランに仕立てあげていく，そのような両者の協力関係が『指導書』からは浮かび上がる。

マシュー（あるいはマティアス）・ダーリーは二番目の妻メアリとともに制作した「マカロ

ニ」シリーズなどの風刺画で名高い。現存する自らの商用名刺（トレードカード）に「版画師，彫刻師，製造業者，修復，出版，素描の教師，素描家」とあるように，肩書きは多岐にわたっていた。印刷販売を兼ねていた店は「団栗（=Acorn）」あるいは「黄金の団栗（=Golden Acorn）」と呼ばれ，いくたびも住所を移している[7]。大英博物館には「P. O. A. G. B（Professor of Ornament to the Academy of Great Britain =大英アカデミーの装飾教授）」と記されたダーリーの自画像版画が二点ある［1771年，J,2.32; 1775年，1850, 0810.198］。風刺画家のユーモアある自称ととれるが，英国の「装飾（Ornament）」を一手に引き受けるという自負も伺えよう。ダーリーは版画以外にも一時期は壁紙や家具，建築のデザインをしていたが，特定できる作品はない[8]。様式を縦横無尽に取り入れ，シノワズリなど当代の流行を図案集や風刺画の形で広めていったことは，ダーリーのストランド39番地にあった店先でたむろする「マカロニ」たちの様子から伝わってくる［図１］。

［図１］ダーリー，「マカロニ版画店」，1772年7月14日，エッチング，着色，大英博物館，J, 5.46

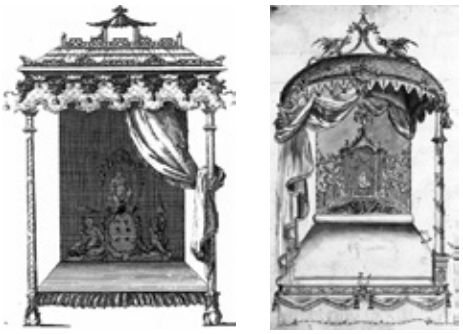
ダーリー作のシノワズリ・デザインの商用名刺は現在４点確認できる。なかには『指導書』にある椅子とキャビネットに類似する例がある［図２］[9]。『指導書』に先行するダーリーによるシノワズリの図案集は1750年から1751年７月頃製作，出版された『中国，ゴシック，現代の椅子に関する新書，ブルック・テーラーによる透視図』[10]で，８図版からなる小冊子であった（1766年に再版）。英国で出版されたシノワズリのパターンブックでは最初期の例であるが，装飾はスクロールやアカンサスなどロココ様式に近い。図案をもとにしたとされる椅子が現存する［図３］。

［図２］ダーリー，「ジョン・プラット」商用名刺，1765年頃，エッチング，大英博物館，Heal 28.175

（左）［図３］作者不詳，「マホガニー椅子」，1760年頃，V＆A蔵，W.9-1932
（右）［図４］ダーリー，『中国，ゴシック，現代の椅子に関する新書』，1750-1751年，pl. 2

『指導書』と同年同地で出版された『エドワーズ氏とダーリー氏による現在の趣味を改善するための新しい中国風デザイン書。人物，建物，家具，風景，鳥，獣，花，装飾など』[11]（以下『新しい中国風デザイン書』）はより田舎風（rustic）で荒削りなデザインから緻密な装飾に至るまでシノワズリ一色である。全121図版からなり，７つのセクション

に分かれている（「建物」,「建築付属物」,「風景など」,「動物」,「家具」,「人物」,「花など」）。『指導書』と類似の例がみつかるのは「家具」21点および「建築付属物」14点である［図５，６］。鳥類学者でもあったエドワーズは自然史系の図版を担当しており，それは花鳥，植物などの描写にみられる。一方のダーリーは人物像や風俗，家具や建造物を描いており，ジャパニング，壁紙，彫銀，陶器などの様々な分野で働く職人のデザイン・ソースとなった［図７，８］。



（左）［図５］ダーリー＆エドワーズ，『新しい中国風装飾書』，1754年，pl. 10
（右）［図６］チッペンデール，「円蓋ベッド」，1753-4年，黒インク，グレイウォッシュ，メトロポリタン・ミュージアム，20.40.1（38）

（左）［図７］ダーリー＆エドワーズ，『新しい中国風装飾書』，1754年，pl. 32
（右）［図８］ボウ工房，「深皿」，1765年頃，軟質陶器，釉薬，エナメル，V＆A，310:1-1889

## ２．『指導書』にみられる「中国」，およびその情報源

本章では『指導書』にみられる「中国」を1754年時点で入手しえた情報源をもとに考察する。『指導書』初版の160図版のうち，98点はダーリーによる版画である。初版では印刷者の名前がないため，版画師すなわちダーリーが印刷も行ったと考えられる。チッペンデールと同じ屋根の下，初版は印刷と販売も請け負っていたダーリーは，チッペンデールの片腕だったといえ，図案そのものはダーリーが手掛けていたとされる[12]。1762年版では初版掲載の94点が残され，新たに106図版が加わった。ダーリーとミラー兄弟のほか，７名の版画家が参加しており，作風は異なる。ダーリーが新しく手掛けたのは26点と少ない。新古典様式の図版が増えたことはダーリーの影響力が弱まったことに比している。

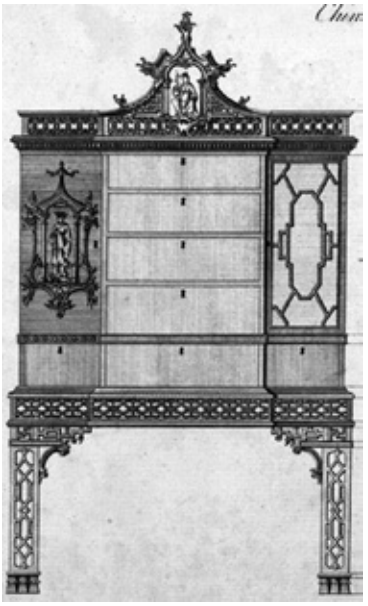
『指導書』のシノワズリは中国風の人物像や組格子，棕櫚のような植物図案を取り入れているが，モチーフは『指導書』以前のイマジネーション溢れる中国像やダーリーの図案集よりも，様式化された特徴がある。その類似点，相違点をともにみていきながら，『指導書』のシノワズリについて以下の三点に分けて検証する。

### １）家具の名称にみられる「中国」

まず明確に家具の名称として登場する「中国」について，標題には47種類の家具が並んでいるが，その中に①「中国式テーブル」（=Chinese Table）②「磁器棚」（=China Shelf,

Shelves for china）③「磁器の壺（China Vase）を置く台」とChinaあるいはChineseを冠する家具がある。さらに各図版のタイトルには⑤「中国風椅子」（=Chinese Chairs）⑥「中国風ソファ」（=Chinese Sopha）⑦「中国風ベッド」（=Chinese Bed）⑧「中国風盆」（=China Tray）（⑦⑧は初版のみ掲載あり）⑨「磁器ケース」（=China Case）が出てくる。このうち，家具の種類と考えられる「中国」は①であり，磁器を表す②③以外は，中国風の意匠を施した家具である。①は朝食用テーブルと同様に小型の簡易な卓であるが，茶器と茶碗が滑り落ちないように甲板に縁があり，茶を飲むために使用された［図９］。中国から輸入された茶は中国をただちに想起させる嗜好品であり，中国式と名付けられたのであろう。ダーリーの『新しい中国風デザイン書』にも中国人風女性が茶器を手にし，熱い茶を注ぐ場面が描かれている（Darly, pls. 3, 116）。装飾は必ずしも中国風とは限らないが，縁が組格子，トンボ貫に棕櫚の装飾など，茶と中国を想起させるものもある（初版pl. 34［1762年版pl. 51］）。中国からの主要輸入品であった磁器＝chinaを飾るための家具（②および⑨）は，デザインも組格子，釣鐘，棕櫚，反り返った屋根，東屋，禽獣，人物像が組み合わさったシノワズリ家具である（②初版pls. 115-116，pls. 117-119［1762年版pls. 141-143］，1762年版pls. 139-143］／⑨初版pls. 105，108-111［1762年版pls. 132-135，137］初版pls. 108-110［1762年版pl. 132, pls. 133-135］，1762年版pl. 136）。③は磁器製壺を置く台であり，東屋，卓，人物，花，柳が描かれた染付の蓋付壺が描かれているが，台の部分は天使や花綱があしらわれたロココと新古典様式を合わせたデザインとなっている例がある（1762年版pl. 149）。「中国式にならった（after the Chinese Manner）」⑤の７種の椅子，２種の肘掛椅子はいずれも角材の脚，背もたれに組格子，わずかに曲線やロココ風の葉飾りがついている（［図13］，初版pls. 23-25［1762年版pls. 26-28］）。チッペンデールはこれらの椅子は「ご婦人の化粧室に最適で，インディア紙（India Paper）を掛けるとなおよい。中国の寺にも合う」[13]としている。ノステル・プライオリやブロケット・ホールに残る寝室と化粧室のように，トータルな中国趣味が想定されており，あくまでプライベートな空間への適用を勧めている。中国とインドの区別はついておらず，「中国式飾り棚」には「インディア棚」（=An India Cabinet）と説明があり，組格子の台輪，脚，支輪，羽目，天板中央と左の羽目に中国風人物像が装飾されている［図10（1762年版ではpl. 123）］。インディア紙については，1650年頃から輸入されていた中国製壁紙はインドを経由して伝わっていたので，こうした混同はしばしばみられた。ダーリーの『新しい中国風デザイン書』には「インドの島」

［図９］作者不詳，「中国式テーブル」，1755 - 60年頃，マホガニー，メトロポリタン・ミュージアム，64.101.1099



［図10］チッペンデール，『指導書』，1754年，pl. 93（部分）

［図11］ダーリー，『新しい中国風デザイン書』，1754年，pl. 12

（左）［図12］ハーフペニー，『中国趣味の田舎風建築』，1752年，pl. 46
（右）［図13］チッペンデール，「中国風椅子」（部分），1753-4年頃，pl. 23，黒インク，グレイウォッシュ，メトロポリタン・ミュージアム，20.40.1（23）

「インドの風景」という版画が２点掲載されている（［図11］および Darly, pl. 16）。中にはインド製のチンツを使った壁紙もあったが，両者の違いは曖昧であった。

### ２）装飾，浮彫にみられる「中国」

#### ［１］組格子

１）に挙げたように，中国式ないしは中国風と題された家具には組格子がしばしば使われている。格子は14世紀にはすでにドイツのリネン刺繍に登場するが，その後現在まで最も多用されたシノワズリ装飾である。イングランドで組格子を使った家具は，ウィリアムとジョン・ハーフペニーが背板が格子でカブリオール脚の椅子を『中国趣味の田舎風建築』に掲載しているのが先駆例である［図12］。ジョン・リンネルはハーフペニーよりさらに早く1751年に組格子を背板に用いた椅子，長椅子，ベッドを制作しているが，それらはチッペンデールの中国風椅子に類似する［V & A 蔵，W.33-1990］。初版ではゴシック椅子，中国式椅子が続けて掲載されているが，ゴシックにはトレーサリー，中国式には組格子が使われている。中国式盆，中国式柵の図版は格子のパターンに焦点があてられている。そのほか中国と明記されていないが，朝食用テーブル，サイドボード・テーブル，書物机，書棚，衣装箪笥，衣装箱，衣装プレス，壁掛け棚，燭台，時計ケース，卓上時計ケースにも組格子が繰り返し用いられている。また標題にはゴシックとあっても，組格子を使っている例もある（初版 pls. 94, 97。1762年版 pls. 124, 126）。「格子（Frets）」と題された図版（初版 pls. 150-153［内 pls. 151-152は1762年版 pls. 192-193］）は，ダーリーの『新しい中国風デザイン書』「建築付属物」で紹介された例（Darly, pls. 81，83-84，113）と似ているが，完全に一致するパターンはない。ハーフペニーの『中国趣味の田舎風建築』に掲載

されている「格子」は，パターンに注目した最初の例といえよう[14]。ダーリーの『新しい中国風デザイン書』に寺，橋，小部屋，柵，扉，欄干，垣根，楼閣の装飾の一部に格子が描かれているように，格子＝中国というイメージの源泉は，もとは中国の風景画に描かれていた格子の装飾が，単独でパターン柄となり，使用されるようになっていったと考えられる。それが『指導書』ではテーブルの幕板や袖，椅子の背板や脚，台輪の刳型，腕木に使われ，実用に合わせてさらに単純化，様式化していった。

### ［2］人物，動植物，風景

シノワズリのモチーフは必ずしも中国風と題された家具にのみ適用されるのではなく，「フランス式（＝ロココ様式）」の椅子，ソファ，火よけの布張に，中国風意匠を刺繍やタペストリ織で施す例がある［図14］。こうした図案が平面だけでなく，浮彫や時には家具の構造の一部となっている場合がある［図10, 18参照］。中国風の人物像や花鳥図はダーリーの『新しい中国風デザイン書』に共通する。

［図14］チッペンデール，「フランス式椅子」（部分），1753-54年頃，黒インク，グレイウォッシュ，メトロポリタン・ミュージアム，20.40.1（14）

### 3）シノワズリの情報源

1754年時点で中国風の図案はどれほど流通しており，情報源は何であったのか。シノワズリの起源は1295年のマルコ・ポーロのアジアからの帰還に始まるが，英国で中国からの物品を目にする機会が急増したのは17世紀以降のオランダ，英国の東インド会社の貿易が開始してからである。中国製磁器，のちには日本製やオランダのデルフト焼きに代表されるヨーロッパで試作された陶磁器に描かれた中国風モチーフがプロトタイプとなり，17世紀後半から18世紀初頭にかけて広まった。万暦・康熙年間に大量に輸出された青花磁器，17世紀後半の「チャイニーズ・イマリ（伊万里写しの中国磁器）」に描かれた代表的なモチーフは人物文，山水文，花鳥文，楼閣文であった。16世紀半ばから輸入されていた日本の漆器に蒔絵された文様や，オランダ銀器，マヨリカ焼きの図案もシノワズリのデザイン・ソースとなった。イングランドではジャパニングの家具が17世紀後半になるとさかんに製作され，チッペンデールもジャパナーを雇ってジャパニングしたシノワズリ家具をカタログに掲載している[15]。1650年頃からは中国の壁紙が東インド会社により輸入されている。1720年代には毎年通商季節になると，東インド会社から４隻，インドから無所属の船が広東に停泊し，茶や陶磁

器を運んでおり，中国からの物品の流通を促進した。

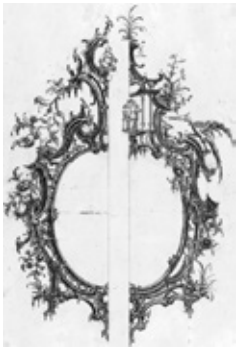
『指導書』のシノワズリはこうした陶磁器，漆器，織物，壁紙などからのモチーフの引用のほか，複製版画からの引用が指摘できる。イングランドでは17世紀末に出版の卸売制度が始まり，18世紀初頭には1000部ないし2000部が一度に刷られるようになり，その結果海外の書物の翻訳や複製版画も多く出回るようになった。ジャン・バティスト・デュ・アルドらイエズス会士の中国に関する報告書，ヨハン・ニューホフ著『オランダ東インド会社派遣使節中国紀行』，オランダ人牧師アーノルドゥス・モンタヌスによる『日本への渡航』に掲載された図版は，いずれもシノワズリ・モチーフの引用元となった[16]。1709年と1735年に著作権法が制定されているが，この時代はまだ転載に対する意識は低く，類似のイメージが広まることがよくあった。ダーリーの『新しい中国風デザイン書』の人物，風俗はデュ・アルド，ニューホフ，モンタヌスの挿絵に負うところが大きい［図15, 16］。時代が下り，1730年代以降には出版文化が拡大し，1732年刊行の *Gentleman's Magazine* を皮切りにした雑誌の定期刊行に伴うジャーナリズムの活性化と時を同じくするように，パターンブックの出版が増加した。『指導書』への影響関係が指摘されるのは，先述したウィリアムとジョン・ハーフペニー，ジョン・リンネル，マティアス・ロックらの図案である。人物像など具象的なイメージはダーリーの版画に共通し，いずれも西洋的な面立ちで彫りが深いことからも，先行する西洋人による旅行記が情報源となっている可能性が高い。つまり，西洋によって一度咀嚼された，あるいは再構築されたシノワズリを吸収していたといえよう。ダーリーの『新しい中国風デザイン書』はチッペンデールより有機的であり，自然をそのまま引用している図案が目立つが，アン・プエツの指摘では1740年代まで，エッチングは芸術家の精神の生きたイメージを投影するものであり，商業性より芸術性に重きが置かれていたという[17]。実作を意識していなかったダーリーに比べ，チッペンデールは自身も強調するように，多様性と実用性を第一に考え，

［図15］モンタヌス，『日本への渡航』，1670年，p.476-77.

（左）［図16］デュ・アルド，『中国史』，1736年，vol. 2, p. 211.
（右）［図17］ダーリー，『新しい中国風デザイン書』，1754 年，pl. 47

『指導書』の標題にあるように家庭用の家具を供給することを想定している。

前世紀までの旅行記とともにデザイン・ソースとなったのが，フランス発のロココ・シノワズリである。英国のロココ様式の精華と言われるジランドールと鏡枠にみられるように，ダーリーとチッペンデールのシノワズリは，ロココ様式との混合が顕著である［図18, 19］。イングランドではアントワーヌ・ワトーやフランソワーズ・ブーシエらフランス人画家による図案が版画で紹介され，ロココ・シノワズリのコピーを生み出した。当代のフランス人画家たちの中でも，ダーリーとの関係が判明しているのが，ジャン・ピユマン（1728-1808）である。リヨン生まれのピユマンは15歳でゴブラン工場の職工となった。ゴブラン工場では当時ブーシエらの原画のタペストリが制作されており，ロココ・シノワズリは人気の図案であった。ピユマンは17歳のときスペイン，ポルトガルへ渡り，1754年に渡英する直前にはホセ１世の第一画家に昇進していた。マリア・ゴードン－スミスによれば，ピユマンはロンドンに拠点を移した当初は図案家の修行をし，ダーリーの『新しい中国風デザイン書』の版画を一部手掛けている[18]。翌年，ピユマンは自身による６図版からなる『新しい中国装飾の本』[19]を出版して人気版画家となった。振付師であり，王立ドゥルーリーレーン劇場バレーマスターであったチャールズ・レビエッツという強力なパトロンも得る。レビエッツは俳優デイヴィッド・ギャリックと劇場を共同経営していたが，ギャリックはチッペンデールの最大の顧客の一人であったことからも，同時代の文化サークルを通じての緩やかな繋がりを確認できる。ピユマンは1767年には『中国様式の装飾と花130図』[20]を出版しており，英国のシノワズリ形成に一役買った。ピユマン，ダーリーを経て，ロココ・シノワズリは『指導書』に応用されていった。



（左）［図18］チッペンデール，「鏡枠」，1753-4年頃，黒インク，グレイウォッシュ，メトロポリタン・ミュージアム，20.40.1（64）
（右）［図19］ダーリー，『新しい中国風デザイン書』，1754年，pl. 61

### ３．『指導書』にみられる様式

1754年初版と1762年版で大幅な改訂が見られたことは，第二章でも述べたが，副題も異なっている。すなわち初版では『…ゴシック，中国，現代趣味のもっとも優雅で実用的な家庭向け家具の大コレクション』とある箇所が，1762年版では『…最先端の趣味のもっとも優雅で実用的な家庭向け家具の大コレクション』に変更されている。ゴシック，中国，現代すなわちロココ（フランス）様式と選択肢を限定することを避け，より幅広いデザインを提供できる

とみせる意図が働いていたととれる。イングランドの現代（ロココ）様式を推進したのはセント・マーティンズ・レーン・アカデミーで，ユベール・グラブロー，フランソワーズ・ルーブリアック，ウィリアム・ホガースらが教鞭をとった。アカデミーの舞台となった（オールド・）スローターズ・コーヒーハウスにはジャーナリストらが集い，商品に関する最新の情報が飛び交っていた。チッペンデールとダーリーの店舗があったストランドとセント・マーティンズ・レーンは目と鼻の先で，周辺は版画師，鍍金，家具，布張職人が集まり，ロンドンで当時最先端の流行を生み出す界隈であった。ダーリーはアカデミーの向かいで一時素描教室を開いていた。アカデミーの中心人物であったホガースは英国美術を代表する画家といえるが，1720年頃独立するまでは，レスターフィールズのエリス・ギャンブルのもとで版画師の修業を積み，商用名刺，本の挿絵，紋章や画家の版画を手掛けていたので，ダーリーと経歴は似ている。ホガースは自著『美の分析』[21] で純粋絵画のみならず，椅子や家具，奢侈品，日用品，礼儀正しいふるまいについても語っており，その思考はチッペンデールの実践と一致している。プエツはチッペンデールが一時アカデミーに在籍していたとしており[22]，セント・マーティンズ・レーンを舞台に新しい様式を求めた彼らは時代の機運を共有していたといえよう。

1730年代から83年まで，英国は政治的安定と経済上の繁栄が実感され始めた頃であり，フランスに対する優位が見え出したが，文化芸術に関しては，パリはつねにロンドンに先行していた。1754年にはストランドにアンチ・ガリカン（反仏）協会が設立されているように，両国間の戦争が絶えなかったフランスへは愛憎半ばする感情がみられる。チッペンデールが『指導書』の標題をフランス式とせず，モダンと曖昧にしたり，シノワズリと組み合わせているのも，愛国的な世情を睨んでのことであったとも考えられる。1762年版ではフランス色は影を潜め，序文の装飾帯にブリタニア像が登場しているように，一層愛国主義的な新古典主義様式が喧伝されるようになっていた[23]。

1762年版では明らかなシノワズリを修正し，18世紀後半新たなトレンドとなった新古典様式が増えている。初版にはなかったトロフィーの図案が使われていることからも，ルネサンス以降の古典様式復興デザインを積極的に取り入れていこうとする姿勢が伺える。それはロカイユ，Cスクロール，天使，カリアティード，禽獣，魚獣，花綱，楽器，リボン，ライオン，マツカサ，カルトゥーシュ，甲冑，灯火，（骨）壺などと組み合わさることで，古典主義の理知的なスタイルよりはバロック的な様相を醸し出している。そのほとんどがダーリー以外の版画師による。一般にゴシックや中国，ロココ様式は18世紀後半下火になったといわれるが，1762年２月27日付の序文には「とくにゴシックおよび中国式を表現するのに，すでに同業者たちはたえまない努力を続けてきている」という初版からの一文が残されている。そのことを裏付けるように，1762年版で新たに追加されたロココ，ゴシック，シノワズリ風の家具もあ

る。とはいえ一方でカタログからゴシックの表記は減り，トレーサリーやフォイルを用いたデザインも掲載されているが，ゴシックと明記されなくなっている（1762年版 pl. 25）。ダーリーの1762年頃の商用名刺もシノワズリから古典主義的な図版に変化した［図20］。

［図20］ダーリー，「ダーリー商用名刺」，1762年頃，版画，大英博物館，Heal59.49

『指導書』の冒頭でトスカーナ，ドーリア，イオニア，コリント，コンポジットの５つのオーダーが列挙されているのはチッペンデールによれば，家具職人は科学や遠近法の知識がなくては仕事ができないという理由による[24]。これはきわめて先駆的な発想であり，家具のパターンブックにオーダーや遠近法が掲載されるのは『指導書』が初めてであった。そもそもオーダーそして遠近法という古典様式の規範が重視されるようになったのは英国では17世紀後半のイニゴ・ジョーンズを経て，18世紀初頭のパッラーディオ主義，そして18世紀後半の新古典様式の文脈においてであったが，それは何よりも建築において先行した考え方であった。チッペンデールは『指導書』の宣伝で「ユニバーサル・ユーティリティ」[25]を強調していることからも，規範そして，実用化を前提としていた。1760年にはダーリーも版画を提供したウィリアム・インスとジョージ・メイヒューの『家庭用家具の普遍的システム』[26]が出版され，家具製造でも実寸法を用いた合理性が求められるようになる。見て楽しむだけのパターンブックとは異なる，実用に基づいた家具の制作を意識し，合理主義精神に富んだ消費者にも納得できるような商品造りを目指していたのであろう。チッペンデールの家具はゴシック，ロココ，シノワズリ，新古典様式と多岐にわたっているが，構造はいずれも正確な実寸をもとにしている点がダーリーの図案集とは異なる。自身はアンチアカデミズムを標榜していたホガースが「物体の質量と比率は合目的性と適切性によって左右される。椅子，テーブルその他の道具や家具の大きさと比率を決めるのはこの原理である」[27]と述べているのは偶然ではなかろう。また，新古典様式以外の家具にも家具の台輪，刳形，飾柱，支輪，脚に５つのオーダーは転用された。「最近では多様性を渇望する傾向が強く，新奇であるというだけで中国建築のつまらぬ模倣ですら流行しているくらい…」[28]と，ホガースはシノワズリに対しては懐疑的であったが，チッペンデールはホガースのいうみすぼらしい直線と下品な曲線の中間に位置する（第九章「波打つ線による構成について」）均衡のとれた，蛇行する線を比率と正確な寸法をもって採択し，シノワズリ・デザインに取り入れている。この考え方はロックの認識論を規定とした自然界の事物が内包する美に目を向ける英国のロマン主義へと繋がっていく。『美の分析』標題紙にある比率＋優美＋多様性が組み合わさった結果の美をチッ

ペンデールは理解し，さまざまな様式やデザインを取り入れながら実用家具に適用していったといえよう。

## おわりに

以上みてきたように，『指導書』のシノワズリのデザイン・ソースとなったのは，前世紀までの旅行記，フランスのロココ・シノワズリ，自国のパターンブックであり，背景にはイングランドの出版文化の隆盛があった。本稿ではとくにシノワズリの版画を手掛けたダーリーが『指導書』のシノワズリ・デザインに影響を与えている点を考察した。『指導書』に掲載されたロココ，ゴシック，シノワズリ様式は，同時代の証言者アイザック・ウェアが，「無意味な様式」と断じているように，新古典主義に傾倒する啓蒙主義者らからは手厳しい批判を受けている[29]。イエズス会宣教師であり画家のジャン・アティレは『北京近郊中国皇帝の庭園に関する詳述』[30]で中国美術は無秩序の美しさを持ち，芸術のルールから逸脱していると述べているが，これはシノワズリが古典主義の規範から逸脱したものとみなされていたことを物語る。逆の立場からいえば，古典主義へのアンチテーゼとなる新しい様式が模索されたが，それは美に調和，均衡，対称性を求めるシャフツベリ侯率いる新古典主義のアカデミズムに反発したホガースが『美の分析』で語る多様性，非対称の美に他ならなかった。

『指導書』では同時代の建築書に倣って，あくまで古典様式を規範として，シノワズリ，ロココ，ゴシック様式を展開している。しかしながら，チペンデールの周囲には新古典主義を規範とするアカデミズムのみならず，対抗するホガースらコーヒーハウスに集う論客あり，フランスからモダンなスタイルをもたらす芸術家，職人らがおり，富裕な顧客やパトロン，醸成しつつあったジャーナリズム，出版文化があった。これら新しい消費社会の文化，人の往来が，『指導書』が作られ出版された地であるセント・マーティンズ・レーンを中心に活発化したことは，『指導書』のデザインに少なからぬ影響を与えていたといえよう。

### 註

1　本稿では初版はウィスコンシン大学の Digital Library for the Decorative Arts and Material Culture: Image and Text Collections<URL: http:/ /digicoll.library.wisc.edu/cgi-bin/ DLDecArts/DLDecArts-idx?Id=DLDecArts.ChippGentCab>（Access: 2014-06-10），第三版はリプリント版（Dover, New York, 1976）を参照した。原画はメトロポリタン・ミュージアム所蔵のデジタル版を参照した <URL: http://www.metmuseum.org/collection>（Access: 2014-06-10）。

2　ネイサン・ベイリー（?-1742）が「いまの時代ではお金持ちであれば，だれでもジェントルマン［郷

紳］とみなされる」［エイザ・ブリッグズ，今井宏他訳，『イングランド社会史』，筑摩書房，2004年，p. 268］と語るようにジェントルマンは新興の中産階級が含まれる。

3　Hugh Honor, *Chinoiserie: The Vision of Cathay*, London, J. Murray, 1961; Oliver Impey, *Chinoserie: The Impact of Oriental Styles on Western Art and Decoration*, London, Oxford University Press, 1977など。本稿では『オクスフォード現代英英辞典』（2010）にならい，「シノワズリ」を「中国のイメージ，デザイン，技術を西洋美術，家具，建築に使用すること」の意味で用いる。

4　最近の研究では鈴木裕子，「イギリス化する「中国風」: 名誉革命から18世紀半ばのイギリス家具に見るシノワズリ」，『年報地域文化研究』17号，東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻，2014年，41-67頁。藤原貞朗編，「西洋における中国 / 日本 ── 17～19世紀のシノワズリーとジャポニスム ──」報告書，畠山公開シンポジウム第一回，ジャポニスム学会，2012年など。

5　William and John Halfpenny, *Chinese and Gothic Architecture Properly Ornamented*, London, 1752.

6　Christopher Gilbert, *The life and work of Thomas Chippendale*, London, Studio Vista, 1978, p. 7.

7　大英博物館所蔵ダーリーの店の商用名刺と風刺画集に住所と肩書きの変遷がみられる。：１）商用名刺，1748年，Banks 91.7，２）商用名刺，1750年代，Heal 91.25，３）商用名刺，1760年頃，2011, 7084.68，４）商用名刺，1762年頃，Heal 59.40，５）1766年頃の勘定書レターヘッド，Heal 100.27*，６）『さまざまな淑女紳士画家によるカリカチュア，マカロニ第二巻』表紙，1895, 0611.3，７）商用名刺，1780-91年頃，Heal 59, 60

8　ダーリーの晩年の著作に *A New Book of Ceilings*（1760），*Sixty Vases*（1770），*A Complete Body of Architecture*（1773）があり，1765年から71年の間にはロイヤル・アカデミーに設計図を出品している。『ウィトルウィウス・ブリタニクス』の版画を手掛けていることからも晩年は新古典様式の建築に関心が推移したことが伺える（大英博物館蔵，1880, 1113.4572）。

9　註７　２），３）のほか，おもちゃ，刃物店ミルワードの商用名刺（1750-52年頃，大英博物館蔵，Banks52.51），家具職人ジョン・プラットの商用名刺（図２）がある。

10　Matthew Darly, *A New-Book of Chinese, Gothic, & Modern Chairs with the Manner of Putting Them in Perspective According to Brook Taylor*, London, 1750-1751.

11　*A New Book of Chinese Designs Calculated to Improve the present Taste, consisting of Figures, Buildings, & Furniture, Landskips, Birds, Beasts, Flowers and Ornaments; By Messrs. Edwards and Darly*, London, 1754.

12　Frederic W. Burgess, *Antique Furniture*, New York, Putnam's, 1915, p. 189.

13　Chippendale, *op. cit.*, 1762［rep. 1976］, p. 4.

14　William and John Halfpenny, *Rural Architecture in the Chinese Taste*, London, 1752, pls. 2-5.

15　Chippendale, *op. cit.*, 1762［rep. 1976］, p. 16.

16　Jean-Baptiste Du Halde, *The General History of China Containing a Geographical, Historical, Chronological, Political and Physical Description of the Empire of China, Chinese-Tartary, Corea, and Thibet. . .*（English ed.: 1741）; Johan Nieuhoff, *An embassy from the East-India Company of the*

*United Provinces, to the Grand Tartar Cham Emperor of China. . .* (English ed.: 1669); Arnoldus Montanus, *Atlas Japannensis*, (English ed.: 1670).

17 Anne Puetz, 'Drawing from Fancy: The Intersection of Art and Design in Mid-Eighteenth-Century London', *RIHA Journal*, Special Issue 2014 Jan.–Mar., p. 27.

18 Maria Gordon-Smith, 'English Engravings of Picturesque Views after Jean Pillement (1728-1808)', *Artibus et Historiae*, Vol. 25, No. 49, 2004, p. 65.

19 Jean Pillement, *A New Book of Chinese Ornaments*, London, 1755.

20 Jean Pillement, *One Hundred and Thirty Figures and Ornaments and Some flowers in the Chinese Style*, London, 1767.

21 William Hogarth, *Analysis of Beauty*, London, Leicester Fields, 1753, Dec. 1.

22 Puetz, *op. cit.*, p. 36.

23 Chippendale, *op. cit.*, 1762 [rep. 1976], p. [ 1 ].

24 1762年版の標題では「遠近法」の説明が省かれている。初版には一点透視図法で書かれたキャビネットと椅子が掲載されているが，1762年版にはない。チッペンデールは1732年出版のジェームズ・ギブズによる『建築のさまざまな部分のドローイングのためのルール』(=*Rules for Drawing the Several Parts of Architecture*) の５つのオーダーについてのキャプションを転載している。

25 Gilbert, *op. cit.*, p. 66.

26 William Ince and George Mayhew, *Universal System of Household Furniture*, London, 1762.

27 Hogarth, *op. cit.*, p. 14.［引用箇所は下記翻訳書による：宮崎直子訳『美の解析』，中央公論美術出版，2007年，p. 33］

28 *Ibid.*, p. 45.［同掲書，p. 62］

29 Michael Snodin and John Styles eds., *Design & the Decorative Arts: Britain 1500-1900*, London, V&A Publications, 2001, p. 193.

30 Jean Attiret, *A Particular account of the Emperor of China's Gardens near Pekin* (French ed. 1749; English ed.: 1752).